



サハリンを旅して

朴 順子

(前橋市国際交流協会・ハンゲル講師)

一時帰国残留日本人に同行して

サハリンという名の由来は、アイヌ語のカムイ・カラ・プト・ヤ・モリシ（神が河口に造った島）もしくは満州語のサハリヤン・ウラ・アンガ・ハダ（黒竜江の対岸の島）によると言われている。北海道宗谷岬から43km、成田から2時間、時差2時間。戦前には北緯50度線を境に南半分が樺太と呼ばれていたサハリン。

昨年10月、日本サハリン協会がサポートする残留日本人の一時帰国者に同行して初めてサハリンに渡った。同伴の家族にはコリアンもロシア人もいて行き交う言語もロシア語だった。

戦前、サハリンには朝鮮半島出身者が3万人以上いたと言われている。戦後「日本人」から「朝鮮人」になった人たちは日本人女性と結婚した人以外は日本への渡航が認められず、ソ連の社会主義体制下で新たな苦難の道を歩むことになった。母国訪問が実現したのは1989年、永住帰国は1992年から（戦後生まれの家族同伴不可）だった。故郷の土を踏むまでになんと半世紀を要した。

日本、韓国、ロシア料理が並んで

現地では温かく迎えていただき自宅に招かれてご馳走になった。日本、韓国、ロシアがテーブルに仲良く並ぶメニューだった。日本の流行歌、ロシアの「カチューシャ」、韓国の民謡など、食器をたたきながら歌い、踊り、大いに盛り上がった。

なぜか昔からここにいたような懐かしさがこみあげてきた。そう、私が生まれ育った大阪のコリアンの町もこんな雰囲気だった。そのお宅の60代のご夫婦とは韓国語で話せた。



ところがパスポートに韓国名が記載されている奥様は日本人だという。朝鮮人との結婚も多く、また日本人であることを公にできない状況での選択だったようだ。戦後、日本人学校がなくなり新たに開校された朝鮮人学校に通っていたが、行政の決定により1964年からソ連の学校で学ぶようになったそうだ。

権さんと出会って

両替に行った銀行で「日本の方ですか」と話しかけてきたご姉妹が韓国人だったので大いに会話が弾み、行員の女性からお静かにと注意を受けたほどだった。

80代のお姉さまは韓国に永住帰国しているとのこと。70代の妹の権さんは美術館でボランティアをされていると聞いて訪ねてみた。



中央が権さん 右が朴さん

奇遇にも権さんが朝鮮学校に通っていた時代の教科書や成績表、教室の風景や卒業写真などが特別に展示されていた。興味深く見入った私は本当に驚いた。

ハンブルで書かれた教科書に載っていた物語は私も朝鮮学校で学んだものだった。「小学校」ではなく「初級学校」、成績表も5段階評価で表彰状などの様式も同じだった。白黒の卒業写真には懐かしさすら感じた。ソ連の少年団「ピオネール」メンバーのピンにはレーニンの肖像と「いつでも準備よし」と刻まれているようだが、私たちが敬礼をしながら口をそろえて同じように言っていた。社会主義国ソ連の教育スタイルだとは思っていたが、それを証明する展示に認識も新ただった。

「恨」…過酷な運命に翻弄されて

戦後、サハリンに残されたコリアンの多くは故郷に帰る日を夢見て北朝鮮籍やソ連国籍をとらない無国籍者が多かったという。しかし言葉の壁や職業上の不利益、言論や移動の自由制限などの現実を前に次世代の為の選択を迫られることになった。出身地ではない北朝鮮への帰国がソ連の後押しによって進められ、宣伝文句を信じた多くの若者が1960年代に移って行き、そのほとんどが再び戻ることがなかった。私の姉の家族も1960年、「地

上の楽園」と謳われた北朝鮮に新潟からソ連の船に乗って別れて行った。姉は亡くなるまで両親に会うことも日本に来ることも叶わなかった。

思うに、韓国人がよく歌にする「恨(ハン)」とは自分の意思とはかけ離れた過酷な運命に翻弄され、その、ままならないやるせなさが心の奥底で炎となった感情ではないだろうか。死ぬほどもがいて力を尽くしても一瞬にして日常を奪われる時代を生きてきた人々がいる。生きることが何よりも難しかった時代を、それでも歯を食いしばり力強く生きてきた人々がいる。そんな思いを強くしたサハリンの旅だった。

今年の6月に再びのサハリン

「百万本のバラプロジェクト」加藤登紀子コンサートツアーに参加した。今回も多く笑顔に迎えられ里帰りした気分だった。遠くから駆け付けた夜勤明けの充血した目が今も忘れられない。

満席のチェーホフ劇場に響き渡った日本の歌声に、遠い日の故郷に想いを馳せ涙した人も多かった。「ふるさと」をみんなで歌いながら胸が熱くなった。

この1年でサハリンは近くて近い存在になった。



加藤登紀子さんを囲んで記念撮影